

梅花女子大学文化表現学部紀要
第十二号（二〇一五年三月二〇日刊）抜刷

「さいはひ」考―ことばと文化、そして文学へ―

中
川
正
美

「さいはひ」考 ― ことばと文化、そして文学へ ―

中川正美

一 はじめに

平安仮名文の語義は、語形が変わらない場合、ややもすると現代語と同様と解してしまわれることが多い。「さいはひ」もその一つで、辞書類では「幸福」「幸運」と記述され、現代語と同様に捉えられていることが多く、その語義はいまだ十分に検討されていない。

たとえば、『岩波古語辞典』（大野晋氏・岩波書店・一九七四年二月）では、「サキハヒの音便形」とし、「幸運。幸福」と記述している。「さきはひ」については「サキ（咲き）・サキハヒ（幸・サカリ（盛））と同根。生長のはたらきが頂点に達して、外に形を開く意。ハヒはニギハヒのハヒと同じ」「サキハヒは植物の繁茂が人間に仕合せをもたらす意から成立した語であるに對し、サチは狩猟の獲物の豊富が人間に仕合せをもたらす意から成立した語」と語構成と類義語から説明している。『角川古語大辞典』（角川書店でも語義を「一よい運勢。幸運」、「二、幸運に恵まれて栄えている状態。幸福」、「三、幸運に恵まれたよい機会。物事をするのに都合のいい状態。好機」と「運」で説明しながら、状態については「幸福」と言い換えている。

現代語の辞書では、『日本国語大辞典第二版』（小学館、二〇〇一年五月）は「神仙など他が与えてくれたと感じられる、自分にとって

非常に望ましく、またしあわせに感じられる状態。運のよいこと。幸福であること。またそのさま。幸福。しあわせ」とあって、「運」と「幸福」「しあわせ」を並列している。『広辞苑』（岩波書店）でも「運がよく恵まれた状態であること。しあわせ。幸福。幸運。」とやはり並列している。これは、森田良行氏が『日本語をみがく小辞典 名詞篇』（講談社現代新書・一九八七年一〇月）で、

「幸い」は「幸う」から来た名詞。「さきわう」は「言霊の幸う国」のように、盛んなとか栄えるの意味だ。これは主として草木が盛んに繁茂し、五穀豊穡で栄えゆくところから生まれた語で、人々に仕合せを与える様を実生活に写してとらえている。（中略）食糧の豊かさが即幸福を意味するとは、何と物質主義なことよと思われるかもしれないが、万事乏しかった古代社会にあつては、食の不安がなく常に満たされているというところが、最大の幸福であつたろう。（傍線は筆者）

と説いておられるように、現代人に向けて説明するために「幸福」としかいいようがないのだろう。現代語の「幸福」は「心が満ち足りていること。また、そのさま」などと説かれ、「運」を云々されない。平安時代の「さいはひ」はどうであつたのか。

早くに、平安時代の「さいはひ」に注目されたのは原田芳起氏

で、「神仏の恩寵としてその人に与えられた栄え」と説かれ、次いで原岡文子氏は「幸ひ人中の君」〔講座源氏物語の世界第八集〕有斐閣、一九八三年六月）で、源氏物語では「幸ひ」の語は女君に集中して用いられており、「幸福と置き換えられるよりは幸運と置き換えるのにむしろふさわしい」と説かれ、「幸ひ」に自ずと潜む脆さや危うさから宇治中君の生や物語の変容を指摘された。ただ、両氏とも「さいはひ」を抽象的に捉えられ、女君の幸福という点から論じておられるため、語としての考察は十分とはいえない。

ことは、特に文学作品のことは、作品固有の語義をになう場合と、作品を超えて時代の文化をになう場合とがあり、「さいはひ」は具体的な裏付けを持っているとおぼしい。平安人は何をもって「さいはひ」と考えているのか、どういう事態を「さいはひ」と表現しているのかを明らかにする必要がある。

二 平安仮名文の「さいはひ」概観

平安仮名文に認められる「さいはひ」をまとめると表1のようになる。⁽²⁾土佐日記・大和物語・和泉式部日記・更級日記には認められない。参考として万葉集の「さきはひ」とその動詞形も含めた。こうしてみると、「さいはひ」はあまり用いられていない。作品の長さを鑑みると、源氏物語三四例に対して、九分の一の長さの落窪物語が二〇例、二分の一のうつつほ物語が二四例、四分の一の狭衣物語が一一例で、落窪物語とうつつほ物語に頻用されており、むしろ源氏物語はそれほど頻度が高くないといえよう。

表1 平安仮名文の「さいはひ」

	さいはひ		さいはひ		さいはひ		さいはひ		さいはひ		総計
	歌	歌	会	地	会	地	会	地	会	地	
万葉集	1	1									2
竹取物語									1		1
伊勢物語			1								1
蜻蛉日記				4							4
落窪物語			12	4	1	2	1				20
うつつほ物語			19	2	1		2				24
枕草子				2							2
源氏物語			13	4	6	4	5	2			34
紫式部日記			2	1	1						4
浜松中納言			1	1							2
夜の寝覚			3	1			1				5
狭衣物語			3		4	3	1				11

また、上代の万葉集こそ和歌だが、平安時代では八代集に認められず、作中和歌にも認められない。散文では、心中思惟も会話に含めると、落窪物語では会話一四例に対して地の文六例、うつつほ物語では二〇例に対して四例、源氏物語では二四例に対して一〇例と、その後の物語も同様で、地の文より会話文に多く認められる。蜻蛉日記と枕草子は地の文にしか認められないが、一人称限定視点だから筆者の会話と考えられよう。

平安仮名文の「さいはひ」はもっぱら散文に名詞として用いられるをり、対義語は「わがはひ」である。うつつほ物語では、

- (1) 幸ひあらば、その幸ひ極めむ時、禍ひ極まる身ならば、その禍ひ限りになりて命縮まり、
 (2) わが親は、この二つの琴をば、幸ひにも禍ひにも、極めていみじからむ時掻き鳴らせとこそそのたまひしか。

(俊蔭四六)

(俊蔭八四)

表2 「さいはひ」男女別

	さいはひ			幸ひ人		
	男	女	人	男	女	人
万葉集	1		1			
竹取物語	1					
伊勢物語	1					
蜻蛉日記	2	1	1			
落窪物語	2	17		1		
うつほ物語	6	15	1		2	
枕草子		2				
源氏物語		22	5		7	
紫式部日記	1	3				
浜松中納言		2				
夜の寝覚	1	3			1	
狭衣物語	1	9			1	

と、俊蔭が遺言で秘琴を弾く時を「幸ひ」と「禍ひ」の両極端の場合を指示している。「わざはひ」からすれば「さいはひ」は人間の努力とは関わらないもの、本人の努力や働きとは関係なくもたらされるもの、向こうからやってくるもので、天から物が落ちてくるように避けられぬものとなろう。植物の生長が盛んなことを表す「サキ」も、狩猟の獲物が豊富であることを表す類義語の「サチ」も主体の行為や意思で左右できることではない。好運としかいいようがない事態で、当人にとって良き事ならば「幸ひ」、悪しき事ならば「禍ひ」と呼ばれるのだろう。また、室町時代から認められる「しあはせ」は「為合はす」の名詞形で、ものごとをうまくやらせる意だから、能動性のある行為である。平安仮名文の「さいはひ」は受動性を核としており、現代語の「幸福」の意はそぐわないだろう。

表2は「さいはひ」を手中にした人物を男女別でみたものである。人間一般の場合は「人」で示した。女性に多いとはいえ、竹取物語と伊勢物語は男性だけだし、蜻蛉日記は男性二例女君一例、落窪物語は男性三例女性一七例、うつほ物語は男性六例女性一七例と、男

君にもかなり用いられている。紫式部日記でも男性一例女性三例だから、わずかに二例にすぎない浜松中納言物語はともかく、源氏物語で、女性だけに用いられているのは作品の特性と考えられよう。どんな状況を幸いと捉えているのか、個々の作品を見ていくと、従来の解釈が変わってくるし、文学の史的展開も視野に入ってくる。

三 万葉集・初期物語

「さいはひ」は、上代では「汝がみことの成し幸波閉賜はば」（広瀬大忌祭祝詞）のように「さきはひ」であった。

- (1) 神代より 言ひ伝て来らく そらみつ 大和の国は 皇神の
いつくしき国 言霊の 佐吉播布国と 語り継ぎ 言ひ継がひ
けり ……
(2) 福のいかなる人か黒髪白くなるまで妹が声聞く
(万葉五・八九四・憶良・好去好来歌)

(1)は音仮名で「佐吉播布」と記し、言霊が威力を発揮する国と大和を嘉している。宣命の言い回し「天に坐す神地に坐す神の相ひうづなひ奉り佐枳波倍奉り」（二三詔）で天の神地の神が与えるというように、「さきはひ」の状態とするのは神霊であって人間ではない。(2)は訓仮名で、いつたい「さきはひ」のどんな人だというのだろうか、共白髪となるまで妻の声を聞けるとは、と言っているのだが、これは挽歌で、老年まで妻と共に過ごす、そんな男は「さきはひ」だ、偕老同穴などまれだと反語で表現して妻の死を悲嘆している。ここで共白髪を「さきはひ」とするのは、寿命が人智を越えたもの

だからである。「さいはひ」は人間の努力や行為によって、その対価として得られるものではないという認識があるからこうした歌となる。植物の生長が盛んだという「サキ」も、狩猟の獲物が豊富であるという「サチ」も、人間の行為や意思で左右できることではない。「さいはひ」は好運、福運としかいいようがない事態を表す語と考えられよう。

平安の初期仮名文、竹取物語や伊勢物語でも「さいはひ」は神威に関わるものであった。

(3) 楫取り答へて申す、「こころ船に乗りてまかり歩くに、まだかかるわびしき目を見ず。御船海の底に入らずは、雷落ちかかりぬべし。もし、幸ひに神の助けあらば、南海に吹かれおはしぬべし。うたである主の御許に仕うまつりて、すずろなる死にをすべかめるかな」と、楫取り嘆く。
(竹取物語四六)

(4) 男、文おこせたり。得て後のことなりけり。「雨の降りぬべきになむ見わづらひはべる。身幸ひあらば、この雨は降らじ」といへりければ、例の男、女に代はりて詠みてやらす。

(伊勢物語一〇七段、二〇六)

いずれも仮定表現で、(3)の竹取物語では龍の首の玉を取りに海原に乗り出し、暴風雨に遭遇した大伴大納言に楫取りが、助かる道は神の助けで南海に流れ着くだけだと絶望し、(4)の伊勢物語では藤原敏行が女に「身幸ひあらば、この雨は降らじ」と雨を口実に、逢いに行けないと、言い送っている。雨が止むかどうかは男に左右できるものではない。神の恵みを受け、沈没から助かることも雨が止むのも、自然の摂理、神威のしからしむるところであって、人間はそれ

を受けるしかない。「さいはひ」は神の与える福運、好運で、初期散文での「さいはひ」は上代と同じく自然現象、神威のもたらす神秘という意味合いで用いられているのである。

四 「さいはひ」の変容

ところが、蜻蛉日記以降の「さいはひ」は人事に変わっている。神威は前面に出ない。実生活と関わる日記などをみていこう。

(1) 月夜の頃よからぬ物語して、あはれなるさまのことども語らひても(中略)

曇り夜の月とわが身の行く末のおぼかなさはいづれまされり

返りごと、たはぶれのやうに、

おしはかる月は西へぞ行く先はわれのみこそは知るべかりけれ

など、頼もしげに見ゆれど、わが家とおぼしきところは、異になむあんめれば、いと思はずにのみぞ、世はありける。幸ひある人のためには、年月見し人も、あまたの子など持たらぬを、かくものはなくて、思ふことのみしげし。

(蜻蛉日記上二二九)

康保元年の秋、愛の不安を訴える道綱母に兼家は頼もしく答えるが、兼家が寄る辺としていくのは時姫だろうと察している筆者にとって、状況は厳しい。長年連れ添っても子供は道綱一人で兼家のために大勢産んでいないからこのように「ものはかなき」ありさま

なのだと悩みを表出している。それは兼家を「幸ひある人」と捉えているからである。この時兼家は停滞から脱して左京大夫に転じている。道綱母は、幸運に恵まれて昇進し、これから政界で地位を得て躍進していく兼家にとって多くの子女が必要となるのにと悩んでいるのである。

また、天禄三年二月には、夢を信じるなどたわけたことと思いがらも、夢解きを聞いて「さらぬ御族にはあらねば、わがひとり持たる人、もしおぼえぬ幸ひもやとぞ、心のうちに思ふ」(下二七八)と、道綱の立身を夢見ている。蜻蛉日記という男性にとつての「さいはひ」とは昇格し、上達部となり、政界で力を持つことなのである。

一方、自身については「きはめて幸ひなかりける身なり」(中二二二)と考えている。女性にとつての「さいはひ」はどのようなことだったのだろうか。枕草子では、

(2)受領の北の方にて国へ下るをこそは、よろしき人の幸ひの際と思ひて、めでうらやむめれ。ただ人の上達部の北の方になり、上達部の御むすめ后にゐたまふこそは、めでたきことなめれ。

(枕草子、位こそなほめでたきものはあれ三二六)

世間では、中流階級の女の「幸ひの際」は受領の北の方になることだと思っている。しかし、中の品の娘が上達部の北の方になったり、上達部の娘が后になることをこそ「さいはひ」というのだと力説している。「めでうらや」むというから、受領の北の方になるのも際だつのだろうが、それを枕草子では「えせさいはひ」(生ひ先なく、まめやかに五六)と切り捨てている。志は高く、というところだろうか。

(3)「宮の御父にてまろわろからず、まろがむすめにて宮わろくおはしまさず。母もまた幸ひありと思ひて、笑ひたまふめり。よいをとこは持たりかし、と思ひためり」と、たはぶれきこえたまふも、こよなき御酔ひのまぎれなりと見ゆ。

(紫式部日記一六七)

紫式部日記では、敦成親王五十日の祝で、機嫌良く酔った道長が満足のあまり、中宮の父として私は不相応ではなく、私の娘として中宮も不相応ではいらつしやらない、宮の母もまた「幸ひあり」と思っておられるようだと言を飛ばしている。娘のおかげで倫子が坊がねの祖母となったのだ、いずれは帝の祖母だ、それは私を夫としたからだ、私のお陰なのだぞと恩を着せたのである。この「幸ひ」は社会的地位の上昇である。一方、

(4)少少將の君の、いとあてにをかしげにて、世をうしと思ひしみてゐたまへるを見はべるなり。父君より事始まりて、人のほどよりは、幸ひのこよなく後れたまへるなめりかし。

(紫式部日記一七四)

源雅信の孫、少少將の君については「人のほどよりは、幸ひのこよなく後れたまへる」とその不運に同情している。父右少弁時通の出家によつて家格が下がって女房として出仕することとなったため、こちらは階級の下降である。つまり、階級の上昇と下降について「さいはひ」の有無をはかっていると知られよう。

では、つぎの紫式部の父、為時の言葉はどうなのだろうか。

(5)この式部丞といふ人の、童にて書読みはべりし時、聞きならひつつ、かの人はおそう読み取り、忘るるところをも、あやしき

までさとはべりしかば、書に心入れたる親は、「口惜しう、男子にて持たらぬこそ幸ひはなかりけれ」とぞ、常に嘆かれはべりし。

(紫式部日記二〇九)

漢学の才に優れている式部が男子でないのに「さいはひ」に恵まれないと常に嘆息したというのだが、思うに、漢学が家業となつていった為時にとつて、そうでなくなることは不運としか言いようのないことであつたらう。伝えられている惟規は和歌の方に心を寄せていたらしく、ここは少年時というよりは、後年を含めた記述なのではないか。為時は式部の才に、男子であれば家格の向上も期待できるのにと嘆じたのではないか。この「さいはひ」も、社会での位置と関わりと考えられる。

こうしてみると、平安時代の貴族にとつての「さいはひ」とは社会的地位の上昇にほかならない。男にとつては官途の躍進、権門に成り上がることに、女にとつては、婚姻によつて所属している階級から抜け出て上昇することで、それは自助努力によつて達成されることではない。運に左右されると考えていたのである。

すると、つぎの解釈も考え直した方がいい。

(6)女房集まりて、「御前はかくおはすれば、御幸ひは少なきなり。

なでふ女が真名文は読む。昔は経読むをだに人は制しき」としりうごち言ふを聞きはべるにも、物忌みける人の、行く末命長かめるよしども、見えぬためしなりと、言はまほしくはべれど、思ひくまなきやうなり、ことはたさもあり。

(紫式部日記二〇四)

紫式部が女房たちから、漢籍を好むから「さいはひ」が少ないのだ

と陰口を言われているのだが、ここは従来考えられていたような漢籍を読む女が不幸になると責めているのではあるまい。それは「さいはひ」を現代語の「幸福」と誤解した解釈である。この時代の「さいはひ」は幸運なのだから、漢籍にかまけて、殿方と出会った時、関心を持たれるようお化粧などに気を配つてふるまわない、せっかく彰子に出仕して時めく殿方と交渉しているのに、と残念がつて愚痴を言っているのではないか。社会的地位の向上をいう「さいはひ」からはそう解されるのである。

五 落窪物語

「さいはひ」が男にとつても女にとつても社会的な昇格を意味しているのなら、それは文学にどのように影響しているのだろうか。

落窪物語以降の物語においても「さいはひ」が男子にとつて昇進し上達部となること、娘を后にし、孫を天子として持つ、摂政や関白になること、女にとつては中の品なら上達部の北の方、上達部の娘なら后になること、帝の皇子を儲けること、息子が立坊し、帝となつてその生母となり祖母となるとしていることは変わらない。社会的地位の上昇を「さいはひ」と考えるのは当時の文化である。それを物語はどのように取り入れているのだろうか。

まず、「さいはひ」が頻用されている落窪物語をみていこう。

落窪物語の「さいはひ」は、劣り腹で父の顧り見が薄い女君に一一例、継母に二例、三の君・四の君・実の娘たち・女房に各一例、そして父に四例と多用されている。

(1)心のうちには、とありともかきりとも、よきことはありなむや。

女親のおはせぬに幸ひなき身と知りて、いかで死なむと思ふ心深し。尼になりても殿の内離るまじければ、ただ消え失せなむわざもがなと思はず。

(巻一・二二)

物語の最初、落窪の君は自らを「幸ひなき身」と認識している。こはあこぎから少将の懸想を聞いた時の反応で、母がいないので「幸ひ」など考えられない境遇とわが身を規定し、なんとかして死にたい、出家してもここに住むしかないのだからと思い詰めている。言い換えれば「さいはひなき」女君にとって少将の愛を受けることは「幸ひ」にはかならないのである。物語はその過程を描いていく。

継母に閉じ込められた塗籠から救い出され、男君の邸に据えられて、女房を集め始めた時は、

(2)君はまづねびまさりて、いとめでたうて居たまへれば、いみじく幸ひおはしけるとおぼゆ。

く幸ひおはしけるとおぼゆ。

(巻二・一八二)

元の邸から引き抜かれた少納言はその「ねびまさった」た姿に「いみじく幸ひおはしける」と推測し、そこに男君が帰邸し、すぐに共寝するのを目の当たりにして、

(3)少納言、めでたく清げにおはしける君かな。いみじく思ひきこえたまへるにこそあめれ、幸ひある人はめでたきものなりけりと思ひるたり。

(巻二・一八四)

「幸ひある人はめでたきものなりけり」と、女君に威厳が備わったのは男君の愛情の賜物と判断している。以後、女君の「幸ひ」はその人生の節目ごとに語られていく。男君に据えられた存在を知らせた父からは「子どもの中に幸ひありける者」(巻三・三三五)と考え

られ、男君の両親に認められるとその親族から贈り物が多々届けられ、司召で舅と夫が昇進すると「左の大臣の北の方の御幸ひ」と世人から讃えられ、妻を亡くした太宰帥にも「いみじき幸ひおはしける」と思われ、その帥と四君を再縁させ、はなやかな装束をまとわせると「御幸ひのゆかり」と感謝され、夫が太政大臣となって人臣を極め、娘が后となると「大臣の北の方の御幸ひ」と世人に語られる。こうした女君の「幸ひ」はすべて男君の変わらぬ一貫した熱愛に依っている。そんな女君に仕える女房も「幸ひ」と語られる。

つまり、女君の「さいはひ」は男君の愛情ゆえなのである。男君に愛されたからこそ逆境から助け出され、据えられ、やがて夫の両親に認められて、北の方となっていく。劣り腹の女が正妻となること、それが女君にとっての「幸ひ」なのであった。一方、夫の少将に棄てられた三の君は法華八講で中納言になった夫を目にして「わが身の幸ひあらましかば」と嘆いており、四君は女君の配慮で再縁して華やかな装束でいるのを「この君ぞ幸ひおはしましける」と姉妹から見られている。現象だけを見れば、女たちの「幸ひ」は結婚のようだが、そうではない。落窪の女君は男君によって自身の辿る運命から引き上げられたのである。劣り腹の身ではよい婿はなかなか得にくい。そのうえ母も既に亡く、四人の娘を抱えた継母にかかっているのであれば、婿取り自体が難しいであろう。女君は自身の身を置く社会的な位置から上の階層へと上ったのである。父に「子どものなかに幸ひありける者」と言われるゆえんである。四君も面白の駒とあだ名される夫によって貶められた境遇から、太宰帥との再縁によって社会的に上昇したのである。

では、父中納言に四例も認められるのはどうか。中納言はそれなりに高官だから大臣になるならともかく、官職はそのまま、後に男君に大納言を譲ってもらっても「幸ひ」と喜んでいない。ましてや恋を得て伴侶ができる齢でもない。

(4) 明けぬればつとめてより事とく始めたまふ。上達部いと多かり。

まして四位五位数知らず多かり。「年ごろしひ惑ひたまへる中

納言は、いかでかく時の人を婿にて持たりけむ。幸ひ人にこそありけれ」と言ひあさむ。
(巻三・二六〇)

「さいはひ」が認められるのは婿の男君に法華八講を行ってもらった時である。男君が主催した八講には、上達部が多く参会し、四位五位の殿上人は数知らずで、その参会者が父中納言を「幸ひ人」と驚き呆れている。人々は「時の人を婿」としたからだ、婿の威勢ゆえだと思えているのだが、一方で中納言を「年ごろしひ惑ひたまへる」と評していることに注意したい。中納言は官界ではもはや老いぼれていると侮られ、顧慮されず、席を温めているにすぎない存在となっていたのである。その中納言が婿のお陰で人々から目を向けられ、敬意を持たれたのである。薪の行道でも上達部が列を成したので世人から「いみじう老いの幸ひ、面目ありける人かな」(三・二六五)と誉められ、亡くなった時も葬列に男君に続いて四位五位が多く歩んだので「死にの幸ひ限りなし」と評されている。「さいはひ」三例「さいはひ人」一例が認められるのは男君が岳父に孝養を尽くし始めてからで、中納言は婿の恩恵で、侮られ力を失っていた状況から栄誉ある位置に上昇したのである。

「さいはひ」が社会的地位の上昇を意味していたと考ええると、継

母が男君を婿取りしたと思ひ込んで「幸ひあり」と喜んだのもよくわかる。

(5) 北の方、笑みまうけて「かしこくも取りつるかな。われは幸ひありかし。思ふやうなる婿どもを取るかな。ただ今、この君、おとどがね」と吹き散らしたまへば、人々「げに」と聞こゆ。

(巻二・一五四)

継母が「われは幸ひあり」と喜んだのは「この君、おとどがね」と自慢しているように、大臣に成り得る家筋の婿だったからである。それはこの婚姻が娘のためだけではなく、家格の上昇に繋がるからであろう。そして、その上昇は本人の資質や努力によってもたらされるのではなく、他者によってもたらされる。自らを「さいはひあり」と考えるのは、物語では希有なことなのだが、それが逆転して禍となるのだから、効果的な手法であると言えよう。

男君道頼、帯刀、あこぎの「幸ひ」は語られない。上昇は自らの努力で引き寄せたからである。したがって、落窪物語は「さいはひ」が期待されない女君が、男君と出逢い、愛されることによって、社会的な地位を上昇させていく物語、そのおかげで兄弟姉妹、父のみならず継母までが恩恵を蒙る話で、女君は受動的なだけなのである。

六 うつは物語・源氏物語

うつは物語でも何を「さいはひ」としているかは同じである。うつは物語の主たる特徴は落窪物語のような逆境にある女君が男君に出逢って幸運をつかむことではない。うつは物語では権力を手にし

ていくことに主眼があつて、その過程に「さいはひ」が認められる。

紙幅の都合で簡略に述べると、権門への昇格、内親王降嫁、政權掌握、入内、寵愛、皇子の出生、立后に認められ、権勢拡大、家格の上昇に関わつて用いられている。なかでも春宮決定に際しては多く認められ、正頼一族の面々がそれぞれの立場で、「さいはひ」を得ることができるかどうかが固唾を吞んで注視している。決定するのは帝だからである。また、下層でも、俊蔭女を守り仲忠の出生に仕えた姫の弟、時宗が大団円で姿を現し、「年ごろ、田舎にむつかしきめどもを見、またかくいみじういひ懲ぜられて、泣き嘆きてわびしかりつるに、覚えぬ物どもを賜りたるよりも、まだ知らず清らに光りたまふやうなる殿の御容貌を、氣近く、今はわが物と見たてまつらむとするは、いみじき幸ひかな。禍ひはたちまちに変わるものなりけり」。(楼上下五六三)と、仲忠の身近で仕えることを「さいはひ」と感じ入っている。時宗にとつても田舎での生活から都での思いがけぬ榮達で、家格が上昇したのである。

こうしたなか、わずかに二例だが、社会的な地位上昇にかかわらない事例が認められる。

(1) 宮、「さてや、小宮は東宮におはせぬ。おもとこそつらくおはすれ。まろを幸ひなく生み出で、ものを思はせたまふ」。

(蔵開上三七三)

三の宮忠康が「幸ひな」と母の仁寿殿女御をなじっているのは、甥に生まれたのであて宮と結婚できないと、哀しんでいるのである。これは上野宮が偽のあて宮が私の妻となれば地位が上昇すると勝手なことを言っているのとはまるでちがう。純粹に個人的な幸福、愛

する人と結ばれることを言っており、その成否はあて宮しだいだから三宮にとつては宿運なのである。そして、そのあて宮も、

(2) 宮も御方も、すべて一御簾の内にふさに居て見たてまつりたまひて、「なほ似るものはなかりけり」と、「今宮こそ幸ひおはすれ。見聞くかひある御人を一人領じたまひて、使ひ人よりけに從へたまふなる」など、藤壺はのたまふ。(国譲上二二〇)

と、仲忠を覗いて感嘆し、女一宮は「さいはひ」でいらつしやる、仲忠を独り占めして、思うままに従わせているのだから、と羨んでいる。過往は仲忠もあて宮に求婚し、あて宮も憎からず思つていたところが、女一宮が降嫁してからは、仲忠は宮一筋に変わつてしまふ。ここはあて宮の嫉妬である。あて宮は正頼の娘と産まれたからには、一族のために入内し、寵愛を得、皇子を産むことしか選択肢はない。人々から春宮の寵愛を受け、男皇子を二人まで儲け、やがて皇子が坊となり、自らは后となつて、「幸ひ人」と言われるあて宮は、そうなつても、自らの生を嫌がり疎ましく思つている。これは仁寿殿の女御が立后できなかった我が身を「さいはひなき」と嘆いているのとはまるで違ふ。うつほ物語にも蜻蛉日記のように夫の顧り見が薄かつたり、棄てられたことを嘆く例は認められるが、ここでは「さいはひ」があると見なされている者が他者を羨んでいるのである。これはもう、源氏物語に近い。

源氏物語で「さいはひ」があると語られる女君は九名で、紫上四例、明石君三例、玉鬘三例、宇治大君一例、中君四例、浮舟四例で、この六名はいわゆる上の品には属さず、中の品である。秋好中宮の二例、春宮女御の一例は立后するため、大宮の一例は息子頭中将と婿

の源氏がともに権勢を持ったからで、この上の品三名は社会的地位の上昇と関わりう。興味深いのは同じく上の品でも、藤壺宮、六条御息所、葵上、臘月夜尚侍には「さいはひ」が認められないことである。源氏との関係では地位の上昇がないからだろう。しかし、中の品の女君たちは、源氏や匂宮、薫との関係において、階級を超えうる。たとえば、紫上は、

(3)西の対の姫君の御幸ひを世人もめできこゆ。少納言なども人知れず、故尼上の御祈りのしるしと見たてまつる。父親王も思ふさまに聞こえかはしたまふ。嫡腹の限りなくと思すは、はかばかしうもえあらぬに、ねたげなること多くて、継母の北の方は、安からず思すべし。物語にことさらに作り出でたるやうなる御ありさまなり。

(賢木一〇三)

(4)御とぶらひにだに渡りたまはぬを、人の見るらむことも恥づかしく、なかなか知られたてまつらでやみなましを、継母の北の方などの、「にはかなりし幸ひのあわたしき。あなゆゆしや。思ふ人、かたがたにつけて別れたまふ人かな」とのたまひけるを、さるたよりありて漏り聞きたまふにも、いみじう心うければ、これよりも絶えておとづれきこえたまはず。また頼もしき人もなく、げにぞあはれなる御ありさまなる。

(須磨一七二)

(5)今日のかへさ見に出でたまひける上達部など、帰りたまふ道に、かく人の申せば、「いといみじきことにもあるかな。生けるかひありつる幸ひ人の光失ふ日にて、雨はそは降るなりけり」と、うちつけ言したまふ人もあり

(若菜下二三八)

源氏が不遇をかこつ(3)では、二条院に籠もるようなかたちで、紫上

と過ぐすものだから、世人から源氏の寵愛を専らにして、劣り腹の姫君としては「御幸ひ」と見られている。草子地では物語のようなありえない状態だと低徊的に語っている。(4)は源氏がついに失脚した時で、(3)で紫上の「さいはひ」を臍をかむ思いで妬んだ継母が、これみよがしに「さいはひ」は足が速く消えてしまったことと憎まれ口を利いている。そして(5)では紫上が絶え入つたとの報を耳にした上達部が「幸ひ人」と呼んでいる。この三例はすべて源氏の愛情を、劣り腹としては破格の寵愛とみて「さいはひ」と言っているのである。すべて外側からの把握である。(3)や(4)で紫上が源氏の自身への愛をどう受けとっているのか、紫上の心情は語られない。(3)は新枕の後、初めて紫上に言及されるところだが、紫上が源氏が側にいて細やかな愛を注ぐのをどう思ったのかは語られていない。(4)でも紫上が反応したのは継母の憎まれ口に対してであって、むしろこは父からも遠ざかれ、「また頼もしき人もなく、げにぞあはれなる御ありさま」が語られているのである。(5)にしても紫上が絶息したのは、女三宮降嫁による心労の積もつたせいである。それを世間で「幸ひ人」、出身からは破格の寵愛だとしか捉えない。紫上の苦闘し苦悩する内実からはほど遠い世間の目、そこには外面の、自分たちの基準でしか物事を捉えない価値観が呈示されており、それが好意的な評価であるだけに、いつそう本人のあわれが際だってくる。源氏物語で「さいはひ」を語られる中の品の女君たちは、こうした外側からの目、社会的な通念にさらされた、個人の内実、人生という傷みが呈示されているのである。

上代から平安時代の「さいはひ」は、今日考えられているような

精神的な感覚ではなく、神意や他者による受動的なもので具体的な情況や事態に裏付けられていた。

万葉集や初期物語で神威の発現ととられていた自然現象の「さいはひ」は蜻蛉日記以降は人事がその発現と解されるようになった。男にとっては官位の栄達やそれに伴う権力の獲得、女にとっても立后や寵愛、出産など、婚姻による階級の飛び越えに「さいはひ」を用いており、平安貴族が望んでいるのは、社会的地位の上昇であつたと知られる。それは自助努力ではどうにもならないゆえに、「さいはひ」として希求されるものであつた。そうした文化を素直に綴つていったのが落窪物語であつたのだが、やがて人人が無意識に持ち、その中に身を置いている文化ではなく、うつほ物語では作中人物が自らを「幸ひなし」と認めて苦悩する姿を呈示して、社会的階級の上昇を語るなかに、愛や生の問題を織り込むようになり、源氏物語では当該人物が自身を「幸ひなし」と考えて嘆くのではなく、世間⁽³⁾や他者が「幸ひあり」と捉えるという、内と外の矛盾を創出して、女君の生を語っていくようになる。「さいはひ」という文化からは、作品の個性が浮かび上がってくるのである。

注

- (1) 「文学的発想における『さいはひ』」〔樟蔭国文学〕一九七七年一〇月
- (2) 本文は『小学館日本古典文学全集』を用いた。引用文には巻名と頁数を付した。わたくしに表記を変えたところがある。
- (3) 源氏物語で明石君自身が「ただかばかりをさいはひにても、などかやまざらむ」(明石二六四)と嘆いているが、これは源氏の愛を受けただけで「さいはひ」であつた、だから、帰京されても致し方ないと考えているのである。